

佳作

『門』 夏目漱石著

文学部 文学科 4年 笠嶋涼平

主人公宗介は、人々が行き交う往路から半ば隔離されたような場所を選んで居を構え、妻御米と共にひっそりと生活を営んでいる。夜が訪れるとこの夫婦は、闇を弱々しく照らすランプの朧げな暖色のもとへ、そっと肩を寄せ合い集まる。彼等はそうやって、互いの存在の手触りをなんとか確認しようとする。社会を棄てた、あるいはそこから棄てられたこの二人は、自分と同じような孤独を抱えた唯一の他者であるそれぞれの実在の輪郭を、辛うじて捉えようとするのである。

彼等は、妻あるいは夫のほかに、他者を消し去った。彼等の意識に終焉が訪れるまさにその瞬間に至るまで、同じ罪に耐え続けることへの漠然とした不安と焦燥は、終始途切れることがない。このことは彼等に、それぞれの相手のほかに浄土へと還ったのちも共存しうるような他者を見出すことを許さなかつただろう。

なかでも、特に印象的な一節がある。

「彼等の命は、いつの間にか互いの底にまで喰い入った。二人は世間から見れば依然として二人であった。けれども互から云えば、道義上切り離すことの出来ない一つの有機体になった。二人の精神を組み立てる神経系は、最後の繊維に至るまで、互に抱き合って出来上がっていた。」

これは、前述のような夫婦の関係性が、最も色濃く描写されている箇所だろう。彼等の暮らす空間は、いわば俗世間から切り離されたもう一つの小社会であって、そこで二人は、共存するそれぞれの他者を同じ目線の高さで凝視せざるを得ない。そこで互いに見つめ合う者同士は、もはや純粋な別個の存在ではいられず、そのことに宗介はしばしば当惑する。

「罪に耐え続ける」とはどういうことか。彼等の罪とは、不義の恋愛に身を投じたことである。それでは、親族や俗世間から糾弾を受け続けること、すなわち、同じ共同体に属する多数の他者から罪状を突きつけられ続けることだけが、「耐え続ける」ことを意味するだろうか。

それは必ずしもそうではない。それは時に他者や共同体に由来し、また同時に、彼または彼女の脳裏で人知れず繰り返されるような孤独な営みでもある。

人間にはある時から自意識が芽生え、他者も自分と同じように自我を備え持つ。各々の自我は、時に干渉し合い、傷つけ合うこともある。そもそも、精神というものを備え持つ人間の生にどうしても付いて回るような総体的観念を「罪」と呼ぶことがある。それをキリスト教義においては「原罪」と称しているのだと私は考える。

本作に描かれる彼等の暮らしに漂う雰囲気は、下流を流れる濁流のような緩やかさと重々しさとを多分に孕んでいる。私たちはそこに劇的な何かを見出すことはできないが、これはまた同時に、彼等の生活の背後に執念深く付きまとう不明瞭な闇を、静的なかたちで暗示しているように思われる。

読者は、このようにして秘密裏に繰り返される人間の営みに「罪」という名前を与えた太古の見知らぬ人々のことを当て所なく想像すると、様々な想いが自身のうちに湧いてくるのを感じるだろう。それと同時に、何か別のふさわしい名前がありはしないかと考えるきっかけにもなるかもしれない。